

キャンパスというコスモス

山下 裕 子

0 コスモスとの遭遇

人間は誰でも、たくさんの小宇宙から成り立っているコスモスである。キャンパスという小宇宙がその中にどのような形で入り込んでくるのか、その形はその宇宙の数ほど様々だろう。

私にとっての“コスモス”は、まず、国立キャンパスの建物とその配置とからなる物理的空間であった。国立駅を降りて、まっすぐと伸びた緑をたたえた大学通りを足取り軽く濶歩し、広々とした正門をくぐった瞬間から、キャンパスがとても特別な光景として私の中に入り込んできた。入念な彫刻の施された講堂や、モニュメントは、単なるお定まりの大学建築以上のものに映ったし、何ととっても図書館の美しさには息を飲んだ。広々とした庭を一望でき、隔絶された田園の一部でありながら、どこか古い外国の大学の一部にそのままワープさせてくれるような閲覧室の気配にすっかり魅せられたその一瞬、私にとってのキャンパスは、何よりもその美しい建物群とそれが構成する調和の取れた空間、ということになった。

1 共鳴するコスモス

(1) 兼松の音響の謎

時として、何かを契機にして、すっかり忘れ去ったと思っていた記憶が鮮明に蘇る瞬間があるものだ。それは、大学院を了えて、2年半に及ぶ滞欧生活の後に国立に帰ってきた瞬間だった。

教師として、母校に戻ってきた私の眼に映った国立キャンパスは新鮮で、一際美しかった。2年半の滞欧生活の中で、ヨーロッパの建築に親しんだ後では、兼松講堂が単なるヨーロッパの建築様式の模倣ではなくどこか東洋的とさえ思えた。柱に掘られた彫刻など、世界中でここにしか存在しない、卓越した建築家の独創的な創造物であることが体感できるようになっていた。北ヨーロッパの空気は重く、緑は深い。それに配された建築物は冷たい石のテクスチャーを露呈する。しかし、温帯アジアの生暖かい空気を吸った兼松の外壁は明るい色を放ち、思わず触れてみたくなるほどだ。教師としての新しい生活を始めた私の張り切っていてもどこか不安な気持ちを、その包容力のある堂々とした姿がある時は励まし、ある時は慰めてくれた。そんな時期に、音楽家の知人達から、兼松で古楽器のオーケストラのコンサートが開けないだろうか、という相談を受けた。兼松には素晴らしい音響効果があり、日本のクラシック界では、幻のコンサートホールとして知る人ぞ知る存在なのだという。かつて一橋祭がスメタナ四重奏団のコンサートを開催したことがある。そのメンバーが、その音の素晴らしさに感動し、もう一度コンサートを日本でやるなら、是非カネマツでと語ったという。そういう話をそう言えば聞いたことがあったと、疑心暗鬼でおそろおそろ始めたプロジェクトであったが、多くの教官、また事務の方々の協力を得て、昨年5月にコンサートは実現し、700名近い聴衆を得て、成功裡に幕を閉じることができた。コンサートの準備を進めるプロセスで、兼松講堂について、そして国立キャンパスについての謎解きゲームに足を踏み入れることになる。

まず、兼松の音響の謎である。コンサートの計画を始めた当初、兼松講堂は、石造りだとばかり思っていたのだが、音楽家の耳には、木の音が響くという。石だったらもっと残響が残って、こんな切れ味のいい音はしないはずだ、と。答えに窮している過程で、いろいろな事実が明らかになった。兼松は石造りではなく鉄筋コンクリート造りだったのである。そして、三角屋根の構造は非常に入り組んだ材木で組まれているらしい。この屋根の構造が、切れのいい“木の音”を作り出していたのだ。兼松の中に配された怪物の彫

刻や縁飾りの意匠も、一見すると石に彫り込まれているようにみえるが、よく見ると、木彫りに漆喰がかけてある。そして、鉄筋コンクリートという異なった素材との取り合わせが、非常にデリケートな音楽空間を作り出しているらしい。

それにしても、なぜ、鉄筋コンクリートなのだろうか。今でこそ、日本の建築にとって一般的な素材である鉄筋コンクリート造りであるが、日本の近代建築にいかなる素材を用いるべきかは、当時、日本の建築界を一大論争に巻き込んだ大問題だった。兼松講堂は、そのはしりの段階で鉄筋コンクリート造りを採用した建造物となったのである。なぜ、兼松講堂に鉄筋コンクリートが採用されたのかという問いに対する答えは、なぜ、一橋大学が現在の所在地である国立にあるかという問いに対する答えと一致する。それは、国立へのキャンパス移転の直接のきっかけが、関東大震災だったからである。そうわかった途端、国立にキャンパス突如出現の原風景が浮かび上がってくる。

(2) 関東大震災とコンクリート

昨年、我々は大震災を経験したが、1923年（大正12年）、東京を倒壊させた関東大震災の際に、当時、神田一ツ橋にあった一橋大学の前身である東京商科大学キャンパスも全壊した。関東大震災は、東京を徹底的に破壊し尽くし、日本中に大打撃を与えたけれども、一方で、明治時代の近代化により発生してきた都市問題を解決するための新しい都市計画の実施の機会を与えることとなった。経済活動の近代化にともない出現し、膨れ上がったホワイトカラー層のための住宅地を確保するための都市計画が開始されたのもこのタイミングにおいてであった。田園調布における宅地開発がその先鞭となった¹⁾。緑溢れる国立の整然とした美しい街並みもこの時期の都市計画の精神に基づくものらしい。

しかし、当時、東京商科大学の国立への移転の決断は英断だった。当時の武蔵野は一面未開拓の林野であり、都会とは隔絶されていて、都心からの精

神の距離は非常に遠かったからである。そもそも国立という地名すらもともとはなく、当時は、「谷保村字谷保」と呼ばれていた。東京商科大学建設にあたり、鉄道駅を開設することになり、その駅名について教授会でも議論されたが結論には至らず、結局、開発に当たった箱根土地株式会社が国立に決定したという。まず大学の建物を建設するための建築材料の搬入道路を開設し、また上下水道を設置する必要もあり、山林を切り開いての新しい都市開発が行われなければならなかった。結局、大正 13 年 2 月 28 日の特別都市計画委員会における復興計画街路の決定が、大学当局をして移転を決意させる最大の要因であった。政府は復興計画の都市計画事業として 53 の幹線道路の新設を決定したが、神田一ツ橋の東京商科大学の敷地は幹線道路 13, 14, 19, 49 号幹線の新設によって土地・建物の移転を強いられることになった。特に 49 号は敷地の真ん中を走る計画となっていた²⁾。

国立キャンパスの建築計画の中では、兼松講堂の建設がまず開始され、大正 15 年 8 月 6 日起工された。兼松講堂は、兼松商店（現在のカネマツ）が、その創始者である兼松房治郎氏の 13 回忌にあたる大正 14 年、個人の偉業を偲んでその功績を記念するために寄付したものである。総額 50 余万円の寄付は、故人の没後、同社の重役会の発意により、株主総会の決議を経て決定され、毎年の営業利益の一部を積み立てて公益事業資金に当てようという目的で積み立てられたものだったそう³⁾だ。

兼松講堂を始めとする国立キャンパスの一連の建造物の設計者である伊東忠太は、明治から昭和にかけて活躍した日本及びアジア建築の大家として知られる建築家であり、明治神宮や築地本願寺などの設計者として知られている。伊東忠太は、兼松講堂に先駆けて設計した震災記念堂の設計にあたって、鉄筋コンクリートを採用した、震災に強い耐震耐火構造の建築を採用することは、関東大震災の犠牲者の冥福を祈るモニュメントである震災記念堂の建築にとってなくてはならない条件であった⁴⁾。今、問題は、いかなる様式を選択するべきかという点である。伊東忠太は、犠牲者の冥福を祈るためには伝統的な日本の様式に依るべきとして、震災記念堂には日本の仏寺建築の様

式を採用している。国立キャンパスは、東洋建築の大家である伊東の設計した唯一の西洋建築なのである。なぜ、伊東はロマネスク様式を採用したのだろうか？

(3) ロマネスクの謎

先に述べたように、1923年（大正12年）の関東大震災は、東京を壊滅状態に陥れたが、そのことは、都市としての東京の容貌から江戸の顔、そして明治の顔を払い去り、新しい顔を与えることに貢献した。焼け野原になった東京は、新しい世代の建築家達に、その若い才能を発揮する場所と機会を提供した。大学の建築物だけをみても、各大学に現存するモニュメンタルな建造物の多くがこの時期に作られている⁵⁾。東大の安田講堂（大正14年、設計者：岸田日出刀）、また、早稲田の図書館（大正14年、同：今井兼次）がその典型例だ。実は一橋大学の建築だけではなく、他の大学の建築物も当時時期を同じくして新しく建てられたものなのである。これらの若き建築家達は、明治に活躍した第一世代の建築家から数えると第3世代にあたり、その若々しい表現のスタイルを、表現主義に求めた。

西洋の建築様式の体得或いは、それに対するアンティテーゼとしての日本伝統様式の追及といったことが目標とされた明治期の建築だったが、それに次ぐ若い世代は、もっとラディカルで、普遍的、世界的な精神の表現形式を求めている。そして、そうした表現形式の渴望は、日本の建築家だけに共有されていたものではなく、第一次世界大戦後、急進的な民族主義と対抗するインターナショナルイズムの追及という形で、欧米の建築家達にも共通して共有されていた精神だったのである。当時最もラディカルな様式は表現主義であった。明治期を消化しきった新しい近代的日本の建設のシンボルとして、表現主義が、安田講堂にも、早大図書館にも刻印されていった。

さて、それではなぜ、我らが国立キャンパスには、当時最先端であった表現主義が取られずに、ヨーロッパの建築様式の中でもとりわけ古いロマネスク様式が採用されたのだろうか？ 兼松の起工式は大正15年に行われてお

り、安田講堂や早大図書館は大正 14 年に完成しているから、伊東忠太は当然、それらの大学建築計画にも注目していたに違いない。ことに、安田講堂の設計者である岸田日出刀は、伊東忠太の弟子で伊東の伝記を残したほど親密な関係にあった人であるから、直接各大学で進行中の建築計画について話し合いを持つ機会もあったかもしれない。しかし、当時すでに建築界の長老の座についていた伊東は、表現主義のような新しい様式は、建築様式として未熟窮まりないとして、頑として認めなかったという。そこで推測するに、東洋建築に通曉した「大御所」としては、表現主義を掲げた若僧達とは違った形で、新しいことをやってみようと考えたのではないだろうか？ 当時、大学建築といえばゴシック、というのが通り相場であったから、ゴシック以外でかつ普遍性をもつ様式を、という試みだったのかもしれない⁶⁾。

当時未開拓の研究領域である日本建築史を志した伊東忠太は、法隆寺が日本の仏教建築の現存最古の例であり、世界最古の木造建築である、という、我々が中学校の教科書で習う史実の発見者なのである。研究の過程で法隆寺の柱は、ユーラシア大陸経由でギリシアから由来したのかもしれない、というインスピレーションを得た当時 36 歳の彼は、ロバの背にまたがって、中国、インド、ペルシャを仏教建築の源流を求める旅に出かける⁷⁾。アジアの大放浪の後イスタンブールを経てヨーロッパに入った彼の眼に映ったヨーロッパの建築は、当時の日本が血道を挙げて賛美するほど無条件に優れているとは言えなかった。しかし唯一彼を惹き付けたのが、ロマネスク様式であった。ロマネスク様式は、それをもってキリスト教会が初めて全ヨーロッパに統一の建築様式を得たスタイルで、当時 12 世紀頃のヨーロッパは、キリスト教が浸透していたものの、それ以前の土着の信仰もまだまだ、各地に根付いていた。ロマネスクからゴシック、後期ゴシックへと教会の建築様式が変遷していく過程は、キリスト教の教義が、合理性を中心に据えた普遍性の概念を整えていく過程と軌を一にしている。土着の信仰が象徴として持っていた怪物は、ロマネスクの中に取り込まれ、後期ゴシックへと様式が変わる中で、キリスト教の聖像へと場所を譲るようになる。伊藤忠太は、伝記の中で、

その著者である前出の弟子、岸田日出刀にこう語っている。

「伊太利と限らず、その後他の國々でみた建築のなかでは、ロマネスクに深い興味を覺へた。それはなぜだつたか。思ふに、古典が滅んで中世のゴシック様式が興るまでの数百年間のあがきの跡が、このロマネスク建築の中に面白くみられたからであらう。すべて藝術は型がきまつてしまふと面白くない。型がきまるまでの移り變りの動的過程で、ああでもない、こうでもないという苦悶するところに藝術としての面白さが生まれるものと思ふ。ロマネスクはこの好みで歐州建築中一番趣き深く味ひ多い様式だと思つた。」⁸⁾

兼松講堂の開館式は昭和2年11月6日に挙行された。その他の建物の建設が完了し、国立移転が行われたのは1931年(昭和6年)であつた。小平キャンパスの国立への移転が行われる今年からさかのぼること、65年前のことである。

2 コスモスの受胎

(1) 運動するトポス

北に兼松講堂、南に本館、そして西に図書館と三方に配されたロマネスクの建物群の配置は、わずかずつの視点のずれを含んだ運動するトポスを形成している。これらの3つの建物はそれぞれのファサードの中心を結ぶ線を直行させる形で、それぞれが対称的に配されているようでいながら、少しずつずれている。それが空間に動きを与えている。(地図1) この動きは、それぞれの建物の中から外の空間を眺めてよりはっきりする。試みに兼松のサールの出窓から、外を眺めて見るとよい。本館と図書館とを同時に立体をもった姿で一望することができるだろう。どの建物からみても他の建物がパースペクティブに納まるようにこの空間は造られているのである。そのことが、キャンパスという空間に、様々な視点からみた全体性を与えているのだ。この視点の揺らぎから、運動するトポスが生まれる。

地図 1

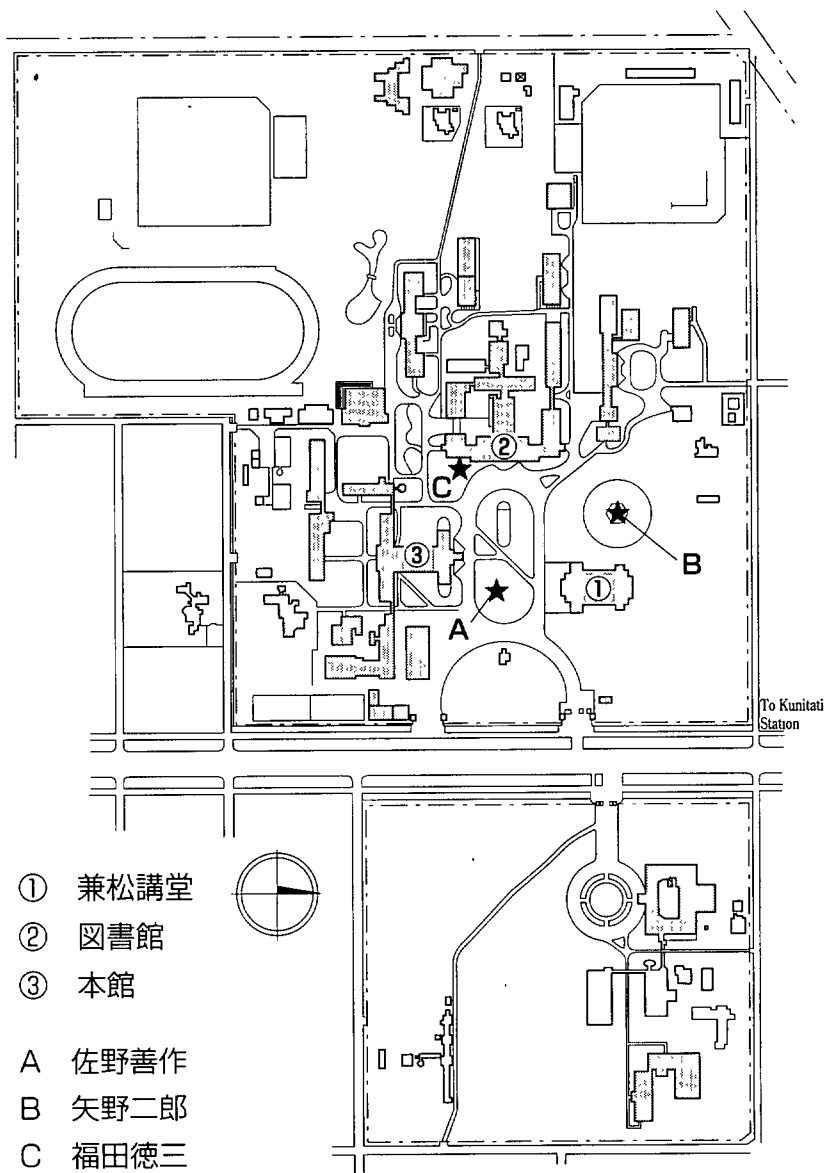




写真 A 佐野善作 東京高等商業高校時代に、高商出身の初めての校長に就任し、大学降格を実現し、初代東京商科大学学長となる。矢野に象徴される「古い世代」と自らもそれに属する「新しい世代」との転換期となった、神田から国立へのキャンパス移転をやった。ちなみに、改築された佐野書院は、もともと学長としての彼の邸宅であった。運動するトボスをついにまとめることの困難性は、運動するトボスのダイナミズムの重要性が大きければ大きいほど、大きくなる。その難事業をやったのけた彼に、敬意を表したい。

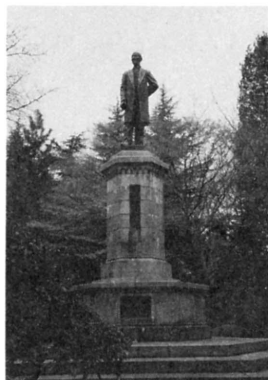


写真 B 矢野二郎 初代の商法講習所所長として、明治期の商業教育、実務教育に対する社会蔑視と戦い、一度廃校になった商法講習所を再建し、自らも教鞭を取り、商法講習所を高等商業高校に昇格させることに生涯を捧げた。初代商業高等学校校長でもある。しかし、あくまでも実業界の専門の実務家を養成するという自らの商業教育理念を断固として主張しつづけたので、実務知識の詰め込み教育に反感し、より高度で本質的な学問体系の修得を渴望する書生派学生の強い反感を買い、1893年（明治26年）高等商業学校長の座を追われた。その後、時を経て高等商業学校から商業大学に昇格した一橋には、大正時代にアカデミズムの黄金期が訪れることになる。その新しい時代を切り開いた佐野善作初代学長の銅像は、創設の父を見上げて、脱帽し、敬意を表している。



写真 C 福田徳三 東京高等商業学校の大学への昇格を主張し、1901年ヨーロッパ留学中に、同じく留学中の学生に呼びかけて、「アカデミズム宣言」とも言うべき「ベルリン宣言」を行った。この宣言が、大学昇格の牽引の精神となった。彼は、単科大学にして「ユニヴァーシティー」であることを主張したが、その精神は、当時の国際的風潮とでも言うべきユニヴァーサルイズムの精神ともつながるものであった。建築と言うなら、西洋の模倣時代への強い反発として現われた、表現主義、セセッションなどの気運と軌を同一にするかもしれない。それはそのまま大正デモクラシーの時代の象徴とも言えよう。しかし、そのラディカルな精神は、古い世代の考え方と真っ向か対立し、学校から追放の憂き目に会う。

トポスの中心に立ち、この空間を中庭の一角から眺めている紳士がいる。口元に豊かな髭をたたえ、左手にステッキを携えたこの温厚そうな紳士こそ、65年前の国立へのキャンパス移転をやったのけた佐野善作学長だ。(写真A)震災で壊滅した本校を立て直し、武蔵野の荒野を開き、新キャンパスの構想を練り、それを着実に実行に移すという、神田からの大移転プロジェクトの総指揮に当たった。質感のある重そうなコートを着たこの姿は、或いは、からっ風の吹きさらす武蔵野の原野を一から切り開いて建築されるキャンパスの現場にたった姿そのままなのかもしれない。このゆらぎをはらんだトポスに立つ彼は何を考えていたのだろうか？伊東忠太は、ひょっとすると、愉しげに軽々とした精神でもって、国立キャンパスにああでもない、こうでもない模索するロマネスクという形、そして運動するトポスを与えてくれたのかもしれないが、その物理的空間で、何を教え、研究し、何を学ぶのか、つまり大学の中味をどのように構築していくかは、まさに、ああでもない、こうでもない、という模索の最中であり、その課程は、まさに産みの苦悩に満ちたものであった。関東大震災が、国立キャンパス計画の直接の契機となったとはいえ、新しいキャンパスという入れ物を必要とした背景には、器に入れる中身の模索という背景があったのである。

震災の3年前、1920年(大正9年)には、東京高等商業学校は、東京商科大学へ昇格している。したがって、関東大震災という災害の偶然の産物であるとは言え、国立の新キャンパスは、本学の大学としての新しいスタートのシンボルとなったわけである。佐野学長の立像の前に立ち、彼と対面してみると、彼の視点が、実は、漠然とキャンパス全体を眺めているのではなく、兼松の横手のある遠くの一点に注がれていることがわかる。そして、彼の右手は、帽子を掴んでいる。まるで、誰かに、敬意を持って、挨拶しているような姿だ。一体誰に？

彼の視点を追っていくと、そこにはゆたかな緑が見えるばかりだ。しかし、今、我々は想像の翼をはばたかせて、佐野学長がそこに立っていた時間に翔んでみなければならない。そのとき、造園されたばかりの中庭の木々は、ま

だ植えられたばかりの若木であった。彼の視点を阻む成長した緑を取り除いてみると、遠方に六角型の台座の上に高く直立する人物の姿が目に入ることだろう。もう一人の紳士、矢野二郎校長である。(写真 B)

(2) 矢野二郎校長のバッション

本学の前身である商法講習所が、銀座の鯛味噌屋の二階に設置されたのが1875年、以来、近代日本の設立のためには、近代的商業の知識に通暁した人材の育成が必要であるという強い信念のもとに、実学の殿堂の礎石を造営した。この商法講習所の牽引者として、本校の基礎を築いた人物こそ、この台座に直立する矢野二郎その人なのである。

矢野二郎は、商法講習所の所長として、商業や実務教育を一段も二段も低いものとして軽視するアカデミズムや世間の蔑視と戦って、実業の位置を高めるために奔走した。官の世界と同格に渡り合える力を獲得したい、と熱望する実業界のリーダー達と連携プレーを取りながら、一介の民間の商法講習所を発展させ、東京商業高等学校を設立し、その発展にその全生涯を捧げたのである。広く海外に模を取りながら、単なる職業訓練校に終わらない、より高度な専門知識を授ける独自の教育機関に発展させようと尽力した。その課程で、諸外国の商業教育機関と比べても決してひけを取らない多岐広範なプログラムが提供できるようになり、教育に携わる教師陣も充実してきた。そうして、高等商業学校から大学への昇格が、次なる目標として設定された。大学への昇格は、商法講習所の設立に携わった人達、より器の大きい人材を求める実業界、特に東京高等商業学校のOB達、そしてまた、学生達の悲願となった。

それは、長期にわたって悲願にとどまり続けることになる。なぜなら、アカデミックな教育は、帝国大学がこれを行い、高等商業学校はあくまでも、実務教育を授ける機関であるべきだ、という文部省の方針が明治期を通して強固であったからである。官と結び付いた帝国大学、それに対して、民のプレゼンスを高めたいという、実業界の思惑がこれに加わり、そのことが文部

省の態度をより頑ななものとしていった⁹⁾。

東京高等商業学校のアイデンティティはそもそも実学の殿堂という点にある。その本領を発揮しながら、より高度な教育機関にレベルアップしていくにはどうしたらいいのか? その方向に関して、矢野校長を初めとする建校の父達と、若手の教師陣、学生達とは異なったヴィジョンを描くようになっていた。より高度に実務的な専門的知識を授けることのできるカリキュラムを充実させていこうとする矢野校長のヴィジョンは、より理論に重点を置いたアカデミックな教育こそ重要であるとする若い世代のヴィジョンと対立していく。実践的な知識を授ける教育の内容が充実すればするほど、それは、一方で生徒の自主性とは離れて、一方的な知識の詰め込み教育的な側面も帯びてくる。ノートさえ取れば卒業できるという形に陥りがちな詰め込み式教育に反発する学生達の体制批判の声が大きくなる。そして、経済経営活動に携わり、真に実業界のリーダーとして立てる人材を育成するためには、理論に基づいた本質的な議論を展開し、自ら判断を下して行くことのできる知的トレーニングが必要であるとの主張がなされるようになった。このような見解の相違は、大学の内部分裂状態を引き起こし、学生は、ついに校長に対する反対運動を行い、矢野校長は辞職に追いこまれることになった。商法講習所を東京高等商業高校へと発展させ、さらに大学へと昇格させていこうとする矢野校長のパッション(情熱)は、同じ情熱をもちながら違うやり方を模索する若い世代の批判するエネルギーの矛先となり、自らを産みだしてくれたものを否定すると言う形のパッション(受難)で幕を閉じることになる。

若い世代には、自らの手でその責を完遂するという情熱と受難が同時に委ねられたのである。

(3) 福田徳三と「ベルリン宣言」の精神

今、佐野善作学長の銅像にもう一度戻って、彼が対面している図書館の方向にまっすぐ、視点を延ばしていってみよう。図書館の向かって左側手前に、植え込みに半分ぐらい姿を隠したレリーフがある。打ちっぱなしのコンクリ

ートに、漆黒のレリーフというモダンなモニュメントに刻み込まれた、インテリ風の丸眼鏡をかけた、少々神経質そうなこの人物が、福田徳三である。(写真C) この人こそ、新しい世代に課せられたパッション(情熱と受難)を一手に引受けた、モダニズムの旗手であった。

若い世代の強いアカデミズムへの志向が、ラディカルな形で結晶したのが、「ベルリン宣言」である。1901年2月「商科大学設立ノ必要」というタイトルで綴られたこの文章は、当時、ヨーロッパに留学中の若き学生達の手になるものであった。その顔ぶれは、福田徳三(留学先:独、仏)、関一(同:ベルギー)、志田鉦太郎(同:独、仏)、石川文吾(同:ベルギー)、滝本美夫(同:独)、石川巖(同:仏)、津村秀末(同:独)、神田乃武(同:英、独)である。彼等が留学中の世紀転換期のヨーロッパでは、各国で、高等な商業教育を授ける商業大学の設立が計画されていた。当時のヨーロッパはドラスティックな経済産業構造の変換期に遭遇していた。産業革命を各国が経験しつつ、その結果効率化し、また飛躍的に拡大した生産力にともなう貿易力、国際的な市場開拓能力が産業の発展のための一秒を争う急務となっていた。グローバルな市場が形成されつつあったのである。国際市場について通曉し、産業をリードしていける人材が求められていた。そして、それは、国民国家の発展と軌を一にしていた。また、一方、経済の発展にともない、そこから生じた富を国民の間で分配するか、という問題が極めて深刻になっていた。従って、商業学にも、単に商業を営むための実務的知識ではなく、商業活動を通して、いかに利潤が社会に分配されるべきかを、国民経済的見地に立って考察するよりどころとなる理論が求められていたのである。このような課題にタックルするための理論の構築がヨーロッパ各国において模索されていた。福田らが、経験したヨーロッパとは、何かセットとなった知識の固まったオーソリティーのヨーロッパではなく、新しい知を求めて試行錯誤する、模索するヨーロッパだったのである。商業大学の設立は、そのような模索を行う場所としての意味があった。福田らの留学生達は、もはや、何か一方的に教えを乞う派遣学生としてではなく、まさに模索するヨーロッパ

の対等な同時代人として、そのような模索のプロセスに参加していたに違いない。特に、ミュンヘンとベルリンで学んだ福田は、ヨーロッパ各地を駆け抜け「ベルリン宣言」に先だって、「欧米商業教育近況」「白耳義国諸法科大学に於ける商業学科」などの通信文を日本に書き送っている¹⁰⁾。

本学のモットーである“Captain of Industry”というスローガンは、トマス・カーライルの“Past and Present”から取られたものだが、この時に生まれた言葉なのである¹¹⁾。当時まだ20代の若き学究によってなされたこのようなアピールは、まだ在学中の学生達の心を打った。1900年には後に初代学長となる佐藤善作が、1901年には福田をはじめとする「ベルリン宣言」一派がぞくぞくと帰国し、母校の教壇に立つと、学生、若手の教官達は一丸となって、商業大学の設立運動を展開した。1902年には、学生の運動機関「一橋会」が結成され、続く1903年にはその機関雑誌『一橋会雑誌』が創刊され、商業大学化を望む学生達の活発な発言の場となった。学生達がペンをふるい、東京高等商業学校が、実務的諸科目を並べたものであり、その結果、学生達は、ただノートを取るばかりで、決まった知識を詰め込むだけで、内発的な知識欲を喚起させられないとして批判している。これに帰国教授達も参加する。

しかし、このような大学構想は、商業高校は実務教育に専念すべしという古い世代の方針に真っ向から対立するものであった。福田徳三は、1904年(明治37年)学校を追放され、以後1918年まで慶応大学で教鞭を取ることになる。(1910年(明治43年)講師として高商の教壇に戻っている)

(4) そしてゼミナール制度が産まれた

福田徳三の追放に象徴される不穏な緊張関係は、文部省の派遣した松崎校長に対する反対運動となり、1909年始めての学生大会が開かれ、校長不信任決議の可決を行った。このことに端を発する甲西事件にまでエスカレートする。

しかし、福田徳三の追放事件は、思わぬ副産物を本校にもたらした。それ

は、ゼミナール制度である。1901年の「ベルリン宣言」で、若くして商業大学のカリキュラム草案を作成した時から、ゼミナール制度の導入を提唱していた福田であるが、皮肉なことに、そのアイデアは、福田が本学を追放された後に彼を慕ってくる学生への私塾という形で実現することになる。これは、彼の正式復帰後、学生の自主的参加に基づくゼミナールが数人の教授人によって開催され、次第にこれが制度化されていった。アカデミズムの最先鋒をラディカルに突っ走った福田に、誰からも望まれた訳でもないのについていった学生達であるから、本当に優秀なサークルが形成されていく。これが、次に来る本学のアカデミズムの黄金時代を産む母体となったのである¹²⁾。

大正に入ると、政府当局、また世論も変わり、商業大学不要論はなりを潜めるようになった。1910年には福田徳三も講師として本学に復帰する。そして1914年には、史上はじめて本学出身の校長が登場することになる。後に初代学長となる佐野善作である。福田は、学生を前にしたある席上で次のような演説を行っている。

「大学とは、研究者の研究の為にする自由、自治、独立なる団体是なり。予の信ずる所、右の如き研究機関にあらざれば、之を大学と呼ぶ可からず。(中略) 今日諸君の論議の題目たりし、「エスケープ」「カンニング」の如き、即ち所謂専門学校の宿弊を明示して余あるものと信ず。専門学校たる限り、此の種の悪習は決して已むものにあらず。

其故は専門教育を授くるに研究を本位とせざる一事に在り。教ゆる者に研究なし、研究なくして何ぞ清新潑刺たる英気あらんや、唯だ一定の科目を強制的に教へ、教へられるのみ。其の活きたる趣味なし、人を動かす所のヴァキマルナシ、エスケープの起こる当然也。而して学年の終わりには試験を課す、カンニングの行はるゝ寧ろ当然也。」¹³⁾

福田は、研究を通して人格形成ができると固く信じていたようだ。研究は学者が行えばいいのであって、社会にでて実務家になる大多数の学生に対しては、実務教育が必要なのではないか？ という意見もあって当然と思われる

るが、研究によって、獲得されるものは専門の知識のみではなく、世界観であって、このことが、独立した人格を確立する基本となると主張した。

「国民経済の発展を完成の域に達せしめんには、先づ以て一般個人の完成を期せざる可からず。(中略)個人の完成とは外ではない、独立自尊の人格を確立するにあるのである。権利義務の思想を明確にするにあるのである。奴隸の主従関係を打破して雇傭関係とし、恩恵の関係を打破して貸借関係としなければならぬ」¹⁴⁾

3 コスモスを超えて

(1) 仕組まれたコスモス

キャンパスは、そういう気分で臨んでみると、ラビリントスのように様々な宇宙内小宇宙を内包する高度にプログラムされた終りのない謎解きのコンピュータ・アドヴェンチャーゲームのようなものだ。

世間から隔絶され、一見のどかで、穏やかな調和の中にたたずんでいる国立キャンパスは、ああでもない、こうでもないのロマネスクの様式を戴き、ああでもない、こうでもないとその大学の在り方をめぐっての模索の舞台となってきた。私自身の模索の小さな歴史も、このキャンパスという小宇宙をこそ軸に展開してきたことを、今さらながら思わざるを得ない。畏ははじめから仕組まれていたのではないか？ 自分自身の研究者としての拙い歩みを振り返っても、キャンパスをあちこちつついて、そこに隠された謎解きの鍵を見つけて、さらにまた、次なる鍵の発見に臨む、といったことの繰り返しを続けて来たような気がする。そして、そのプロセスの中で、自分にとってのコスモスが自分の中に少しずつ像を結び始めたのかもしれない。と思った瞬間に、結局自分の中に焦点を結びつつある問題群が、実は、このキャンパスが創られた時に、すでに抱かれ、論じられてきた問題群に収束していきつつあるのではないか、ということに考えが及び、愕然としてしまうのだ。

福田徳三の残した、アカデミズムに対する考え方やら、社会システムの中で市場経済を位置付けようとする課題やらは、その鍵を鍵として認識できな

いうちは、とっくに解決されてしまったこと、終わってしまったこととして整理できてしまう歴史的ランドスケープにしか過ぎないのだが、鍵がありそうだと気付いた瞬間にそれにかかわらざるを得なくなるような猛烈な磁力を持っている。そして、その謎が謎であることがわかっていて、その解法がわからないとき、自分の無力さがたまらなく嘆かわしく思え、謎に気付くだけのためにこんなに時間を費やしてしまったのか、という思いに襲われてしまう。そして、終わったと思った時に、やっと入り口に戻っている、という巧妙に仕組まれたアドヴェンチャーゲームの罠にはまり込んだのではないかと、永遠の繰り返しの謎解きゲームの回転を回転させつづけるこの強力なコスモスの磁場を恨めしく思ったりする。一体、何をここで、じたばたしているんだ、と。それは、巧妙にプログラムされたコンピューターゲームの時間のない、ヴァーチャルリアリティの“もう一つの世界”にはまり込んで、はっと時計を見て陥る自己嫌悪と少し似ている。

(2) 解釈するコスモス

しかし、キャンパスというコスモスへの冒険が、コンピューター・ゲームと違うのは、それが、それ自体で閉じた世界ではなく、外へと開けているという点である。コンピューターのゲームは、それがどんなに巧みにプログラムされていたとしても、最終的には答えがなければ成立せず、設計者の意図のもとに構築された閉じられた世界である。コンピューターゲームにのめり込んでいくことができるのは、試行錯誤の後に必ず解法があり、最後には必ず終わりがあることが保証されているという安心感の裏付けがあるからこそ、という側面がある。それに対して、キャンパスを舞台にする謎解きゲームには、最終的な答えはない。最終的な答えがない中で、謎解きに挑戦するとき、運がよければそのプロセスで、例え一時的にせよある問いに関する答えが得られるかもしれないが、一生得られないかもしれない。答えが一生得られないかもしれないという見込みの下でいかにゲームに参加するのか、というところに、この冒険の醍醐味がある。この冒険は、キャンパスをトポスとして

繰り広げられるようでありながら、実は、自分というコスモスにおいて、起きていることがらである。キャンパスは謎解きの鍵を与えてくれているようでありながら、本当は何も与えてくれない。鍵が鍵として成立するのは、自分の中のコスモスにそれを鍵だとかぎつけることのできるセンスや感性があるからこそである。そしてこの鍵を通して、キャンパスというコスモスが自分のコスモスの中に胎動し始める。

(3) コスモスを飛び出せ

キャンパスというコスモスを自分の中に抱く鍵を探すためには、現実の世界との関わりがなければならない。そして、コンピューター・ゲームの意味の世界はその中の世界で閉じているが、キャンパスのコスモスを自分の中に抱くことは、そのまま、そのコスモスを通じて、社会を解釈する眼を獲得することに他ならない。つまり、キャンパスというコスモスを獲得するためには、社会の中で生きる必要があるし、コスモスを獲得すると社会が見えてくる。こうした意味で、キャンパスが提供する現実を読み解く鍵の意味はあらかじめ閉じてプログラムのなかで成立しているのではなく、そこに参加する我々の主体性によってその意味が付与されるのである。それは、非常に主観的な世界である。この主観に責任を持つためにこそ、個人を確立する必要がある。そして、それが、個人の主観に基づいた世界であることをしっかりと認識することが、他者の主観に基づいた世界の存在を認識することにつながる。

人間は誰でも、たくさんの小宇宙から成り立っているコスモスである。人の数ほど宇宙は、ある。キャンパスは、我々の解釈の深さに応じて、平坦にも奥行き深いものにもなる。キャンパスと言うコスモスが、運動するトポスとなるのは、その中にいて自分の足で立ち、自分の眼からみたパースペクティヴを個々人が持つからである。

さて、今、キャンパスに立って、茫然としている新入生諸君がどのような謎解きアドヴェンチャーを繰り広げるのだろうか？ 謎解きの鍵を見つける

ためには、とにかくまず動いて観るしかない。キャンパスを探索してみるのもよし、授業に出席するのもよし、教師や同僚や先輩と話してみるのもよし、である。できることなら、できるだけ大きな謎に遭遇したいものだ。

- 1) 藤森照信 (1993)『日本の近代建築 (下) 一大正・昭和編一』岩波書店
- 2) 如水会学園史刊行委員会編 (1989)『大学昇格と籠城事件』社団法人如水会
- 3) 一橋大学学制史専門委員会編 (1983)『一橋大学学制史資料』第8集一橋大学学園史編集委員会
- 4) 岸田日出刀 (1945)『建築学者 伊東忠太』乾元社
- 5) 藤森照信 (1993) 同上
- 6) ちなみに、なぜ、大学の建築がゴシックということになったかという、明治期に日本において西洋建築を指導した主要人物であるコンドルがたまたまゴシックの本家のイギリスの出身であり、彼が、主な公共建築に関与していたという事情もあるらしい。そのコンドルは、東大で建築学を学んだ伊東忠太の指導教授であった。伊東の卒業制作もゴシック様式の教会設計となっている。しかし、それを最後に伊東は日本建築に没頭していくことになる。彼の研究は、明治の西洋万能主義に対する強い反発心によって動機づけられていたから、彼にとってゴシックは押し付けられた西洋万能主義の象徴であったのかもしれない。
- 7) 藤森照信 (1995)『伊東忠太動物園』筑摩書房
- 8) 岸田日出刀 (1945)
- 9) 一橋大学学園史刊行委員会編 (1995)『一橋大学 120 年史』一橋大学
- 10) 同上
- 11) 同上
- 12) 同上
- 13) 同上
- 14) 同上

(一橋大学専任講師)